



「がん哲学外来」を通じて

伊那中央病院院長/信州大学名誉教授 本郷 一博

大学を定年退職し、昨年春から400床ほどの自治体病院に勤務している。地域がん診療拠点病院の役割も担っている病院で、内科系・外科系多くの診療科が連携して担がん患者さんの治療に当たっている。当院では「院長ラウンド」と称して週一回、一日かけて全入院患者さんのお顔を拝見して回っている。

私自身は長年、脳神経外科医として脳腫瘍の患者さんも多くみてきたが、がんを患っている患者さんは決して多くはなかった。二人に一人は罹るといわれていても、それほど多い病気であるという実感はなかったが、すべての病室を定期的に訪ねていると、とても多くのがん患者さんがいることを改めて認識した。

当院では、地域がん診療拠点病院として求められている要件を整備し、がん相談支援センター、緩和ケア外来などをはじめ、患者さんの心のケアもできるようにと「サロンまほら」も開設し、できる限り患者さんの気持ちに寄り添えるよう配慮している。

さて、樋野先生が始められた「がん哲学外来」であるが、私にとっては、2017年3月の「信州大学がん哲学外来 in 軽井沢」が初めての関わりであった。樋野先生のご指導のもと、信州大学医学部附属病院信州がんセンター長の小泉知展先生、軽井沢町国保軽井沢病院院長の牧山尚也先生らとともに記念すべき第一回の開催に至った。

これに関わったのは大変光栄であり、よい機会であった。この後も、「信州大学がん哲学外来 in 軽井沢」が回数を重ねて行われているのはとても嬉しいことである。このような活動が全国各地で行われており、さらに広がっていることは、「がん」に悩む本人、家族にとって大きな福音であろう。社会全体が、「がん」を受け入れ、「担がん患者」を当たり前のこととして受け入れる、そんな時代が早くくることを望んでいる。「がん哲学外来」をはじめとして、ひとの生き方に多くの指針を与えてくださっている樋野先生に改めて心から敬意を表したい。

当院でも、今後「がん」の治療とともに、「がん哲学外来」の活動の趣旨を組んだ「担がん患者さん」に対するケアを積極的に行っていきたい。

信州大学がん哲学外来 in 軽井沢

◇ 毎回申し込みが多く、すぐに定員いっぱいになります。



本郷一博先生



・牧山尚也先生のご挨拶です。



小泉知展先生



・樋野先生の講演の後はカフェが開かれます。毎回、美味しいお菓子とお茶が用意されます。

「がん哲学外来」への思い がん哲学外来市民学会副代表 佐久総合病院副院長 北澤 彰浩

「がん哲学外来」に対する思いは人によって様々であろう。私の「がん哲学外来」に対する思いは2012年佐久市で開催された第1回がん哲学外来市民学会に実行委員長として関わった際の寄稿文の中にある。

『がん哲学外来市民学会第1回大会に寄せる思い』

いよいよ、市民自らが主体となり運営・活動できる学会が産声をあげます。今の日本では、病気となつてついでに病院や医療従事者が主導権を握ってしまい当事者である患者やご家族は受身になってしまいがちです。この学会を通して医療の主役は患者であることを今一度再認識し新しい医療のあり方を皆で構築して行きたいと考えております。特に「がん」はこれからはますます多くの市民に関わる疾患であるからこそ、そして「命に関わる」疾患であるからこそ皆で大事に考えたいと思います。これからの世の中、いつ自分が又は自分の家族が又は自分の友人が「がん」になってもおかしくありません。その時になって慌てなくても良いように、またその時になってすぐに駆け込める場所となれるようにこの市民学会が市民の皆様にとっての拠り所となればと考えております。今回はその大切なスタートです。皆さん、一緒にその記念すべき誕生の瞬間に立ち会ってください、そして自らも一緒に生まれてください。この学会は皆さんが当事者の学会です。より良い拠り所となれるように皆さんと一緒に生きて成長して行きましょう。(第1回がん哲学外来市民学会抄録から抜粋)

以上からわかるように私自身は「がん哲学外来」は市民自らが自分の身体や自分の病気に主体的に関わって行けるようになるためのきっかけになるものだと考えております。実際、樋野先生はがん哲学外来での患者との対話を通して何かを強要したり指示したりすることはありません。患者自らが考え、行動するヒントやきっかけを提案してくださっているのです。私は「がん哲学外来」をきっかけにもっと多くの人々が「がん」のことを考え、「死」のことも考え、そしてその先に「生」「いのち」「最期まで如何に生きる」かについて考え、自分が希望する人生・生き方が出来るようになればと願っています。

このことが叶えられるようこれからも「がん哲学外来」を大事にしていきたいと思っております。